



文部科学大臣杯 3月14~17日 / 稲沢グランドボウル

第61回全日本ボウリング選手権

男長澤椋・女谷原美来選手が JBC最後の全日本選手権者に

4月1日から団体名称がJB (JAPAN BOWLING)に変わるため、この大会がJBC (全日本ボウリング協会)として最後の大会となったが、マスターズ戦は、男子は長澤椋選手(静岡)、女子は谷原美来選手(滋賀)が初優勝で、その歴史に選手権者として名を刻んだ。また団体総合は、男子は学生連合が18大会ぶり4度目、女子は群馬県が2大会連続2度目の優勝で、それぞれ文部科学大臣杯を受賞した。
(主催: (公財)全日本ボウリング協会)



▲ともに初のマスターズ制覇の谷原選手(左)と長澤選手



▲「まさか勝つとは…」と、ビッグタイトル獲得にも、淡々としていた長澤選手



▲2019年(3位)を教訓に、欲しかったタイトルを手にした谷原選手

て、あまり変化を感じなかった。優勝はうれしいのはうれしいけど、よくわからないまま勝ちちゃった感じ」と、無欲の勝利を強調していた。

前回出場(2019年)に続き連続2位の新畑選手は「31ピン差で最終 Gだったので、チャンスはあると思ったけど、出だしで引き離されてしまった。でもベストは尽くしました」

また最終 G175に終わり3位の中村選手は「練習投球はよかったけど、スタートした途端にレーンが変化したように感じた。途中からラインを見つけれられたけど、遅かった」と悔やんだ。

女子・安定感抜群の谷原選手

女子は谷原選手が1回戦657、2回戦652、3回戦647と、際立つ安定感で、2位に約100ピン差をつけていた。94ピン差の2位に久松美穂選手(静岡)がつけ、3回戦で712を打った泉宗心音選手(愛媛)がさらに14ピン差の3位で続いていたほか、2位争いは大混戦となっていた。

最終の4回戦1G目、177の谷原選手に対し、泉宗選手が229を打って58ピン差に詰め、もつれるかと思われたが、「以前10G目までトップにいな



▲「去年は最後の1ゲームで落として6位」から、2位へ成長の跡を見せた渡辺選手



▲「ナショナルチームに残れるかどうかもかかっていたのでホッとした」と泉宗選手

「4月から大学に進学すると群馬県で出られなくなるので、団体総合の2連覇に貢献したいと思って投げていました」

渡辺選手に7ピン逆転されて3位の泉宗選手は「(谷原) 未来さんレベルの左利きには今日は勝てないなという思いがありました。でもこれまで入賞はできても表彰台はなかったのでよかった」と笑顔だった。

☆

団体総合の男子は、マスターズ戦3位の中村選手が、服部寛大選手と組んで2人チーム戦に優勝したほか、各種目でポイントを稼いだ学生連合が、神奈川県に7点差をつける26点で、18大会ぶり4度目の優勝を飾った。

女子も学生連合が健闘したが、6人チーム戦でその学生連合を抑えて優勝した群馬県が、昨年の初優勝に続き、連覇を達成した。

男子・最終Gにもつれる混戦

マスターズ戦には、2人チーム戦、3人チーム戦、6人チーム戦各6Gの個人得点(18G)の上位、男子は26名、女子は20名が進出、ゼロスタートの12Gトータルで争われた。

男子は個人総合2位だった中村祐麻選手(学生連合)が決勝でも好調で、2回戦で785、3回戦は695を打って、トップに立っていた。しかし20ピン差の2位にサウスポーの長澤選手、さらに4ピン差の3位には3G目に300を出した新畑雄飛選手(滋賀)が続き、優勝争いは混戦となっていた。

最終の4回戦は、1G目251を叩いた長澤選手が218の中村選手を逆転してトップに立ったが、「とくに緊張もなく、なるようにしかならない…」と肩の力の抜けた投球で、2G目223、最終G236とまとめ、トータル2789で初優勝を飾った。

マスターズに進んだのは初めてでいきなりの優勝の長澤選手。「マスターズ戦は、1G目あまり感触がよくなって、2G目から昨日使っていたボールに替えたのが正解だった。今日は左の有利さをちょっと感じた。とくに自分は曲がるタイプだから、他の左よりも中を投げてい



▲準備を含めやるべきことはやったと新畑選手



▲「学連の仲間たちの応援が心強かった」と3位の中村選手



▲男子団体総合で18大会ぶりの優勝の学生連合



▲女子団体総合は群馬県が連覇